

## 『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿―第六帖（6）くたにく蓮―

福田 智子

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、くたにく・刈萱・萱・蓮の題に配されている出典未詳歌、九首について注釈を施す。

## 凡 例

一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、考証の結果、出典の見出せなかった歌について注釈を加えるものである。本稿では九首を収めた。

二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を（ ）を付して記す。

三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。

四、本文は、歴史的仮名遣いに統一する。踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を（ ）に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。ただし、漢字仮名の区別は底本のまま

とする。

五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称（永）
- 島原図書館蔵肥前島原松平文庫本 略称（松）
- 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称（和）
- 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称（羅）
- 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称（林）
- 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称（宮）
- 田林義信氏旧蔵本 略称（田）
- ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川文庫本 略称（黒）
- 寛文九年版本 略称（寛）

なお、諸本本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

（永） 細川家永青文庫叢刊3『古今和詞六帖（下）』（汲古書院、昭和五十八年一月）所収の影印

（松） 島原図書館蔵肥前島原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料（寛） 架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称（『新編国歌大観』の目次に拠る）、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」（歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書）とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

## 注 釈

三七八三（くたに）

【本文】

つらゆき

みなかみを山にておつるたきつせのしづくのたえずそくた<sup>(く)</sup>にかけ

【校異】 なし

【語釈】 ○くたに 龍胆（りんどう）の異名か。また牡丹の類か。物名として結句に隠す。「ちりぬればのちはあくたになる花を思ひしらずもまどふてふかな」（古今集・物名・四三五・僧正へんぜう・くたに）。

○みなかみ 流れの源。川上。上流。 ○たきつせ 瀧の急流。激しい流れの川。 ○そそく 水が流れ込む。 ○たにかけ 谷の中の陰になっているところ。

【通釈】

水源を山として流れ落ちる瀧の急流の雫が、絶えることなく流れ込む谷の陰だよ。

【他出】 なし

【考察】

「みなかみ」という語の勅撰集における初出は、『古今集』である。「涙河何みなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり」（恋一・五一・読人しらず・題しらず）、「おちたぎつたきのみなかみとしつもりおいにけらしなくろきすぢなし」（古今集・雑上・九二八・ただみね・ひえの山なるおとはのたきを見てよめる）の二首の歌が見える。そのうち後者は、書陵部蔵御所本丙類忠岑集（五〇一・一二三）八〇番にも載っているが、詞書に「おとはのたきの、しろきゆゑを、きさいの宮のびやうぶのうた」とあり、屏風歌であることが明記されている。『古今集』から『後撰集』の時代、「みなかみ」を詠んだ歌には屏風絵や障子絵など、絵の図柄を詠んだものが多い。古今時代の例としては、「みなかみとむべもいひけり雲よりおちくるかもみゆるたきかな」（伊勢集・六七・たきのもとに人あり）、「水上にひちてさけれど菊花うつるふ陰はながれざりけり」（貫之集・四六六・菊おほく生ひたる河の辺なる人の家に、女どもおほく河づらにいであそぶ）、「みなかみにむすぶ人なみしらたまはやまのをよりぞぬけておちける」（頼基集・一一・あるところの屏風に、しがのやまごえにたきおちたるところ）といった歌があり、また、後撰

時代には、「みなかみのわくにかすみのたなびくははるのくるかもたきのしらいと」(忠見集・五三・かすみたてるやまよりたきおつ)、「水上にはらへてながすことのはをりをなくこそ瀬瀬のしら浪」(信明集・三六・六月)、「山川の水かさまさる紅葉ばはみなかみにこそあめとみゆらめ」(安法法師集・三〇・山川よりもみぢのながるをみて)、「水上に風や吹くらし山川のせぜにもみぢの色ふかくみゆ」(順集・一九六・山川にもみぢながる)、「水上に風吹くらし山川のせにもみぢの早くみゆれば」(順集・二二三・十一月) 他の例が散見される。

当該歌は、「みなかみ」から「たにかげ」へと流れ込む、高低差のある激しい川の流れを詠んだ歌であり、あたかも一幅の絵画のようである。ただし、「たにかげ」の語は、平安期にはまず見られない。『新編国歌大観』では、平安末期の「たにかげのゆきはさえねどあさひさすみねのけしきは春めきにけり」(風情集・四四三・澗底残雪) という例を見出す程度である。「くたに」を物名として詠み込むために、特に選択した語と見られよう。

また、「しづく」が「そそく」という表現も、他例は少ない。平安期の例は、「草も木もおのがさまざまおひにけりひとつのあめのそそくしづくに」(待賢門院堀河集・一二八・葉草喻品) といった例がかるうじて存する。

三七八五 (かるかや)

#### 【本文】

まめなれどよき名もた<sup>(い)</sup>たずかるかやのいざみだれなんしどろもどろに

【校異】 ○いざみたれなんーいと亂なん(松)

【語釈】 ○まめ 誠実であるさま。うわついたところがなく、まじめなさま。ここでは男女の仲についていう。 ○よき名 男女関係についてまじめであるという評判。 ○かるかやの「乱る」につく枕詞。刈り取った萱が乱れやすいことからいう。 ○いざ 相手を誘って自分とともに行動を起こそうと呼びかける語。さあ。 ○みだれなん「みだる」は、好色心に惑う意。 ○しどろもどろ「しどろ」(秩序がなく乱雑なさま)を強めていう語。言動が乱れているさま。ここでは、浮かれた男女関係を形容している。

#### 【通釈】

男女の仲については誠実だけでも、よい評判も立たない。さあ、奔放な恋をしよう、(刈萱のように) 乱れ乱れて。

#### 【他出】

『紫明抄』卷六、梅枝

しどろもどろに

よしとてもよき名もた、すかるかやのいざみたれなんしどろ

もどろに

『河海抄』卷十二、梅枝

しどろもどろにあいきやうつき

よしとてもよき名もた、すかるかやのいざみたれなんしどろ

もどろに

#### 【考察】

『古今集』の「まめなれどなにぞはよけくかるかやのみだれてあれどあしけくもなし」(雑体・一〇五二・題しらず・よみ人しらず)と内容

が酷似する。「まめなれど」という句は、「まめなれどあだなはたちぬたはれじまよる白浪をぬれぎぬにきて」（後撰集・雑一・一二二〇・あさつなの朝臣・女のあだなりといひければ）という歌にも見え、また、「かりそめにそむる心しまめならばなどか雲井をたづねざるべき」（伊勢物語・異本所載歌・補四段・二二五・男）といった「まめならば」という句もあるが、平安和歌の例はそれほど多くはない。

「いざみだれなん」という句は、『後撰集』に「織女の年とはいはじ天河雲たちわたりいざみだれなん」（秋上・二四六・よみ人しらず・七夕をよめる）という例を見出す。後の「よしとだに人にはえこそいはれのかやがした葉にいざみだれなん」（為家千首・八七二・雑二百首）という歌は、当該歌（『古今六帖』三七八五番）を踏まえての作か。

「しどろもどろ」の語は、『新編国歌大観』を検しても『古今六帖』以前には見当たらない。『うつほ物語』や『源氏物語』には用例があることから、当時としては、歌語というよりも散文語であったのであろう。以後の歌には、「花すすき吹きくる風はそむきつしどろもどろにまたぞみだれぬ」（定頼集・三〇四・かへし）、「おほな子がくさかる岡のかるかやは下折れにけりしどろもどろに」（堀河百首・六五一・基俊・刈萱）、「あくたゐてきたなきみぞの水ぐきはかきながせどもしどろもどろに」（散木奇歌集・一三三四・人のもとより巻物に手ならひしてとておくられたりければ、かたのごとくかきておくにかきつけ侍りける）など、刈萱の他、花薄や水荃（筆跡）について用いた例がある。「しどろ」単独ならば、「ふくかぜのしどろにみだるかるかやのいかでかつゆのたまとつらぬく」（肥後集・一〇九・かるかや）、「あさねがみみだれてこひぞしどろなるあふよしもがなもとゆひにせん」（後拾遺集・恋一・六五九・

良暹法師・ふみにかかむよかるべきうたとて俊綱朝臣人人によませはべりけるによめる）といった例を加えることができ、また前掲『堀河百首』には「その原や野風にしだくかるかやのしどろにのみもみだれるかな」（六四七・仲実・刈萱）他二首（三六〇番・六四三番）の歌が見出せる。刈萱の例もあるが、朝寝髪にも用いられる。「しどろもどろ」にせよ「しどろ」にせよ、いずれも乱れたものを形容する。

なお、『林葉累塵集』（下河辺長流編、寛文十年（一六七〇）七月刊）には、「六帖歌に、まめなれどよき名もたたずかるかやのいざみだれなんしどろもどろに、とよめりける歌にならひてよめる」という詞書で、「刈萱のとてもよきなはたたじとて人見の岡に乱れてぞふる」（四三八）、「かるかやに我が身はなりてよしさらばみだれぬ草のならんさがみむ」（四三九）という長流の歌二首が見え、延宝九年（一六八一）五月二十日、長流自撰の『晩花集』二〇七番・二〇八番にも採録される。『古今六帖』が近世初期に享受された具体例として留意したい。

三七八六（かるかや）

#### 【本文】

あきかぜにみだれそめにしかるかやを我ぞつかねてやふきくれみし（ゆ）  
**【校異】** ○。かねて―つかねて（永・松・和・羅・林・宮・田・黒・寛）  
（補入記号）

**【語釈】** ○かるかや 「刈る草」の意で、屋根を葺くために刈り取った草の総称。 ○つかねて 「つかぬ（束ぬ）」は、集めて一つに括る、集めて一緒に束ねる。 ○やふきくれみし 『校證古今歌六帖』は「五句心得ず」と記す。句頭は諸本「ゆ」であるが、字形の類似による「や」の誤りと見て校訂し、「屋葺き」という解を試みた。「くれみし」も難解だが、

「くれ」は、屋根を吹くのに用いる「搏」(板材)か。第四句に係助詞「ぞ」があることから、句末の「し」は結びで、過去の助動詞「き」の連体形と見ると、句末は「見し」か。

#### 【通釈】

秋風が吹いて、刈った萱が乱れ始めたのを、この私が一緒に束ねて、屋根を葺き、搏を見たよ。

#### 【他出】なし

#### 【考察】

「みだれそめにし」といえば、『伊勢物語』初段「みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに」(二)が念頭に浮かぶ。他にも、「さみだれにみだれそめにしわれなればひとをこひちにぬれぬべらなり」(躬恒集・二八・なつのぎふのうた)といった平安期の例はあるが、前掲『伊勢物語』の歌の後世における影響は強い。「我」という語を用いている点も共通する。

「(あき)かぜ」に乱れる「かるかや」の例としてまず挙げられるのは、「よそめにはこともやすらにかるかやをなど秋風のふきみだるらん」(本院左大臣家歌合・六・かるかや 右)や、『順集』一五三番にも載る「ゆく秋のかぜにみだるるかるかやはしめゆふつゆもとまらざりけり」(女四宮歌合・一七・こはひと・かるかや)という歌合歌である。平安期の例は、他にも「ふくかぜのしどろにみだるるかるかやのいかでかつゆのたまとつらぬく」(肥後集・一〇九・かるかや)、「秋風のふきよるごとにかるかやのしたにみだるるまつむしのこゑ」(四条宮下野集・六〇・さとにあるころ、月のあかきに、宮より、しなのののたまへる、かく月のあかきにもまことになむまたせおはします、とて)があり、『堀河百首』

「刈萱」題の歌には、これらの歌語の組み合わせが頻出する。

「つかぬ(束ぬ)」は、「束ね緒」のかたちで「あはれてふ事だになくはなにをかは恋のみだれのつかねをにせむ」(古今集・恋一・五〇二・読人しらず・題しらず)という歌に見え、また、「かりてほすよどのまこもの雨ふればつかねもあへぬこひもするかな」(拾遺集・恋三・八二四・よみ人しらず・題しらず)といった例が見える。いずれも恋心の乱れを詠んでいる。私家集においては、『好忠集』に四首集中して見出せる。「かはづなくゐでのわかごもかりほすとかねもあへずみだれてぞふる」(二一八・四月をはり)、「ほだちする秋はきにけりおりそほちさなへつかねし袖もひななくに」(一八八・はじめの秋 七月)、「やまぢのみしばかるたみのてもたゆくつかねもあへずかぜのさむさに」(三〇四・十月はての三首は三百六十首和歌(毎月集)、「うばらこきてにとりためてはるののふちのわかえををりてつかねん」(三七九・はる十)は、『好忠百首』中の一首である。いずれも季節感を詠んだ歌であり、前掲勅撰集歌と一線を画す。

当該歌に、あえて恋歌の要素を見出すならば、第二句「みだれそめにし」であろう。とはいえ、結句の本文は、そのままでは理解しにくく、一首の意味も判然としない。そこで、「語釈」に結句の校訂案を示し、「通釈」にはそれに基づく試案を提示した。後考を俟つ。

三七八九(かや)

#### 【本文】

かやの野べいともかるるかみねのうへのまつが枝ともにひさしき  
もの(物)



【校異】 ○みね―岸（松・羅紀） ○うへに―うへの（永）上の（松・和・羅・林・宮・田・黒・寛）

【語釈】 ○かや 屋根の葺くのに用いるイネ科、カヤツリグサ科の大形草木の総称。主として、薄、茅、菅<sup>ちがや</sup>などが用いられる。 ○いとも 「いと」をさらに強めた表現。 ○ともに あるものが他のものと同じ状態であるさまを表す。同じように。ここでは、萱と松の枝についていう。

○ひさしきものを「ひさし」は、行く末永い、永遠であるの意。

【通釈】

萱の野辺は、なんと枯れたことか。峰の上の松の枝と同じように、行く末永く変わらぬもののに。

【他出】 なし。ただし、『古今六帖』に重出（『考察』参照）。

【考察】

当該歌は、「かやののべいともかくなるみねのうへの松がえともにひさしきものを」（古今六帖・第二・一一五・冬の）の重出である。後世、『歌枕名寄』に、「かやの野べはいともかなしき峰の上の松えだともに久しきものを」（巻三十五・八九〇六）と載るのも、「野 六帖」と記されていることから、第二帖からの再録であろう。

「かやの野べ」を詠んだ歌は、『新編国歌大観』に拠っても他例を見ない。枯れた「かや」に着目した歌も、「しもがれのあさぢがもとのかるかやのみだれてものをおもふころかな」（是則集・三〇）の他は、後世の例が目につく。「けさみれば野辺のかるかやうらがれておのが色より秋更けにけり」（前長門守時朝入京田舎打聞集・一八九・野刈萱）をはじめ、『伏見院御集』に「かれたるすがたばかりはそれながらその色となきをばなかるかや」（一四四一・枯野、一八八五にも）、「冬がれの

あさぢかるかやふししほれあめさむき日のゆふぐれの庭」（一四八八・冬雨）の二首が見出される。

当該歌のように、「かや」と「まつが枝」とを「ともにひさしきもの」と捉えた歌は、今のところ管見に入らない。当該歌の初句・第二句でも知れるように、冬場は枯れてしまう「かや」であるが、多年生の草が多いことから、あるいは、毎年春になると芽が萌え出てくるところに、永遠性を感じた上での表現か。

なお、第四句を「まつが枝どもは」と校訂すれば、冬枯れの萱に対する常葉の松という対比が読み取れる本文となる。

三七九〇（かや）

【本文】

なぬか<sup>(.)</sup>かるかやは我が身<sup>・</sup>のうへなれや人におもひをつげでやみぬる

【校異】 なし

【語釈】 ○なぬかかるかや 七日の間刈った萱。うずたかく積まれたまま放置されている状態を指すか。刈萱が乱れやすいことから、恋心の乱れを重ねる。 ○うへなれや 「なれや」の「や」は疑問。……なのか。

○おもひをつげで 「おもひ（思ひ）」の「ひ」に「火」を、また「つげで（告げで）」に「付けで」を掛けると見た。「（あの人に）思いを告げないで」の意に、「（刈萱に）火を付けないで」の意を重ねるか。

【通釈】

七日間刈った萱は、私の身の上と同じなのか。萱が、火を付けないでそのままになってしまったように、私は、あの人に気持ちを伝えないで、心乱れたまま終わってしまった。

【他出】 なし

【考察】

「なぬかかかるかや」が何を意味するのか、いまひとつ判然としない。そこで、「かかるかや」が乱れるものであることから、七日間刈った大量の萱が、手の付けようのないほど乱れている様が、下句「人におもひを つげでやみぬる」という状況に陥った人の思いの乱れと重なることを詠んだ歌とみた。

「我が身のうへ」という語句は、『古今集』には見られないが、『後撰集』に、「秋の夜をいたづらにのみおきあかす露はわが身のうへにぞ有りける」（後撰集・秋中・二九〇・よみ人も・題しらず）を含め二例の歌が見える。また、「あきのよにかりとなくねをきくときは我がみのうへと思ひこそすれ」（是貞親王家歌合・五三）、「くさのはにあらぬよなれどともすればつゆはわがみのうへかとぞ見る」（小大君集・五二・又、もく）といった歌に用例を見出すことができる。

また、「我が身」と「……なれや」との組み合わせは、『古今集』に、「いとはるるわが身ははるのこまなれやのがひがてらにはなちすてつる」（雑体・一〇四五）という歌がある。当該歌も、上句で「AはBなれや」と言い、下句でその判断の理由を述べるという構造になっている。

「おもひをつ（ぐ）」という表現は、同じ『古今六帖』の出典未詳歌、「つれもなき人に思ひを春風はわがもゆるごとふきもつげなん」（第一・三八七・はるのかぜ）をはじめとして、「ひとこととゑじのたくひにあらねどもおもひをきみにつぐることなき」（為信集・一四二・はじめて人に）、「さかしらのおもひをつげで白たへの雪まにきざす草をこそおもへ」（重之女集・八・春廿）といった歌に見出せる。

なお、『伊勢物語』の「うぐひすの花を縫ふてふ笠はいなおもひをつ けよほしてかへさむ」（百二十一・一段・二〇四）という歌は、「おもひ」の「ひ」に「火」を掛け、「火を付けよ」と続けた例である。あるいはこの歌も、「思ひを告げよ」の意を重ねるべきか。

三七九二（はちす）

【本文】

はちすばにいであるつゆの玉水はうかべる人のこころとぞみる<sup>(一)</sup>

【校異】 ○いである―出ぬる（松・和・羅・林・紀）出ぬる<sup>をき<sub>朱</sub></sup>（宮）おきある（黒）をきある（寛） ○こ、ろとぞみる―心とぞ<sup>(二字分空白)</sup>「る（林）

【語釈】 ○いである 表に出てそのまま付着している。○玉水 水滴の美称。「玉」に「魂」を響かせる。○うかべる人「うかべる」は、動詞「うかぶ」の已然形に、存続の助動詞「り」の連体形「る」が付いたもの。「玉水が」浮かんでいる」の意に、「成仏する」の意を重ねる。

【通釈】

蓮の葉に置いている露の美しい水滴は、安らかに成仏している人の魂だと思つて見るよ。

【他出】 なし

【考察】

「いである（出で居る）」という語は、『万葉集』にも見られるが、「時つ風吹飯の浜に出で居つつあかふ命は妹がためこそ」（万葉集・巻十二・三二一・五・三二一〇一）をはじめ、その後の「はるのいへのくれなゐにほふものはなはなのなたてにいであるたるいも」（家持集・三四）にも見られるように、人の動作として用いられるこ

とがもつぱらである。一方、黒川文庫本・寛文九年版本の「お（を）きゐる（置き居る）」ならば、勅撰集では『後撰集』に五首（二八五・二九二・三九六・七二〇・一四〇八番）存するのが初出であり、いずれも露との組み合わせで用いられる。私家集においても、「草の葉におきゐる露のきえぬまは玉かとみゆることのはかなさ」（人丸集・二七六・おき）、「秋夜にねでおきゐたるしらつゆは一人ある人のなれるなるべし」（伊勢集・三一四）、「うかびても君はねにけりいかなれば露とおきゐてなき明すらん」（本院侍従・一八・返し）、「露じもとよはにおきゐて冬のよのつきみしほどにそではこほりぬ」（好忠集・三三二・十一月中）、「よもすがらおきゐられつつつゆの身のきえいりつつぞこひわたりける」（千頼集・五四）など、十世紀後半頃の用例も多い。中には「起き居る」と掛けた恋歌もあるが、露との関わりは「いでゐる」よりも強いと言えよう。

蓮と「玉水」を詠んだ歌は、『新編国歌大観』を検しても、当該歌が最初期の例である。平安期には、源俊頼の「玉水をはすのわか葉にまきこめてこぼすや花のひかりなるらん」（散木奇歌集・三六四・蓮花をよめる）の歌を見出す程度である。

「つゆの玉水」の例も、同じ俊頼に「夜をこめてあさたつをの草しげみしをるる袖は露の玉水」（散木奇歌集・七四二・物へまかりけるにあまり夜ぶかくいでて露けかりければよめる）という歌があるが、用例数は稀少である。

「つゆ」が「うかぶ」という表現は、「はちすばにうかぶつゆこそたのまるれなにうつせみのよをなげくらむ」（実方集・一四四・返し）、「なきたまははちすのうへにうかばなむなみだのつゆもゆきやかよふと」（兼

澄集・九九）といった歌に見出すことができる。とくに後者は、蓮の上に玉水（露）が浮かぶ情景に、極楽で魂が成仏するという仏教的救済を重ねている点で、当該歌に共通する。

三七九三（はちす）

#### 【本文】

みどりなりとおもふばかりにはちす葉のかは身にさへもしみにける  
かな

【校異】 ○はかりに―はかり（林）

【語釈】 ○はちす葉のか 蓮の葉の香。和歌に詠まれる例は少ない（「考察」参照）が、いわゆる「六種の薫物」（梅花・荷葉・侍従・菊花・落葉・黒方）のうちの「荷葉」を連想させる。薫物は、仁明天皇の頃に大成し、最も流行したのは、延喜・天曆頃であったという。○身にさへも「さへも」は副助詞「さへ」に係助詞「も」が付いたもの。添加の意を表す。……までも。

#### 【通釈】

（身体が）緑色だと思うほどに、蓮の葉の香は、身体にまでも染みついてしまったなあ。

【他出】 なし

#### 【考察】

「はちす葉」の「みどり」は、『和漢朗詠集』巻上、夏の「蓮」題に配される「風荷老葉蕭条緑 水蓼残花寂寞紅」（一七五・白居易）、はちすは、いまだ老葉は、さびしく、みづは、いまだ、残花は、さびしく、「煙開翠扇清風曉 水泛紅衣白露秋」（一七七・許渾）などの漢詩に用例が見られる。一方、和歌においては、『新編国歌大観』に拠っても、「池



水もみどりもふかきはちす葉にのどかに物のおもほゆるかな」(宇津保物語・きくのえん・四五七・少将なかり)を挙げるにとどまり、稀少である。当該歌を含めた和歌の例は、明らかに漢詩の翻案であろう。

蓮の香を詠んだ例も、やはり漢詩に用例が見出せる。

「葉展影翻当砌月 花開香散入簾風」(和漢朗詠集・上・一七六・白居易・夏蓮)などの例があるが、多くは蓮の花の香を詠んでおり、当該

歌のように、蓮の葉の香を採り上げた明確な例は、漢詩にも見出しにくい。また、平安期和歌においても蓮の香に着目した用例は少なく、かうじて平安末期の例を挙げるのみである。蓮の葉とともに詠まれた覚性法親王の「蓮葉のなびきて浪を打つままにやがてみぎはの風ぞかをれる」(出観集・二三六・河風荷気馥)という歌もあるが、藤原俊成の「明がたは池の蓮もひらくれば玉のすだれに風かをるなり」(長秋詠藻・下・四五二・後夜 暁至りて波の音金の岸に寄る程欲曙風の音珠の簾を過ぐる際)、「うき草の末より風はふくなれど池の蓮ぞまづかをりける」(俊成五杜百首・三三二・蓮)といった作は、蓮の花の香を詠んでいると見られよう。

結句「しみにけるかな」は、「梅のかのかざりなければをる人のてにも袖にしみにけるかな」(貫之集・二〇六)が先行例として挙げられる。後世の歌には、「ゆきずりにひとえだをりしむめがかのふかくも袖にしみにけるかな」(山家集・五九六・寄梅恋)がある。いずれも梅を詠んでおり、当該歌のような蓮の例は、『新編国歌大観』に拠っても他例を見ない。

三七九六(はちす)

#### 【本文】

吹く・かぜはかをのみそふる我がやどのいけのはちすをとりなつくし  
そ

【校異】○かをのみ―かせのみ(林) ○八重―八重(永)池(松・和羅・

林・紀・黒・寛 いけ(宮)

【語釈】○そふる「そふ」は、前からあるものに別のものがさらに加わる意。連体形であるが、ここは連体終止と見た。○とりなつくし「取り尽くす」は、残らず取ってしまう意。「……な……そ」は相手に対して懇願し、婉曲に禁止する気持ちを表す。

#### 【通釈】

吹く風は、香だけを加えて運んでくる。私の家の庭の池の蓮を、どうか残らず取ってしまうわなでくれ。

【他出】なし

#### 【考察】

風が草花の香を運ぶことによって、人がその存在に気づき、手折ってしまうということは、「あき風にかをのみそふるはななればにほふからにぞひとつまるる」(躬恒集・二七八・らに)という物名歌に見出せる。この歌は、「(あき)風」「かをのみそふる」という表現が当該歌と一致し、発想が類似していると考えられる。当該歌は、あるいはこの躬恒歌を念頭に詠まれたものか。

また、風が香を運ぶものであることは、たとえば、「山桜このした風し心あらば香をのみつてよ花なちらしそ」(順集・二〇四)という歌にも見られるところである。当該歌の「かをのみそふる」という表現の裏

に、「花を散らさず」という含意を読み取ることも可能であろう。

結句「とりなつくしそ」は、風に乗って漂う香に誘われてやって来る人々に対する懇願と捉えられよう。

なお、「我がやどのいけ」といえば、『古今集』の「わがやどの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ」（古今集・夏・二三五・よみ人しらず・題しらず）という歌が代表的であろう。後世、慈円が詠んだ「わがやどの池の蓮にそむ心いつかは色にいでんとすらむ」（拾玉集・一一五〇・夏二十首）という歌は、蓮を詠んだきわめて稀な例である。

三七九七（はちす）

【本文】

つゆをだに玉となしつるはちすばにおもふ心をいれてみせばや

【校異】 ○なしつる―ならふる（松・羅）となふる（田）

【語釈】 ○なしつる「なし」は動詞「なす」の連用形。あるものを別のものにする意。 ○いれて「いれ」は動詞「入る」の連用形。外からあるものの内に移し置く意。

【通釈】

露でさえ玉にしてしまう蓮の葉に、あなたを慕う私の恋心を移し置いて、あなたに見せたいものだ。

【他出】 なし

【考察】

「おもふところ」は、「ひとしれず思ふ心は春霞たちいでてきみがめにも見えなむ」（古今集・雑下・九九九・ふちはらのかちおむ・寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける）という歌にも詠まれるよう

に、恋の相手に見せたいものである。だが、目に見えるものではないので、「色ならば移るばかりも染めてまし思ふ心をえやは見せける」（後撰集・恋二・六三一・つらゆき・いひかはしける女のもとより、なほざりにいふにこそあんめれといへりければ）といった歌では、色に染めて見せたいがそれとできないと詠む。

当該歌は、「はちすばのにごりにしまぬ心もてなにかはつゆを玉とあざむく」（古今集・夏・一六五・僧正へんぜう・はちすのつゆを見てよめる）を前提に、「つゆ」を「玉」に変化させる蓮の葉に自らの恋心を載せ、どんなに相手のことを思っているか、誇張して相手に見せたいと詠んだものであろう。

「はちすば」が「つゆ」を「玉」に見せることは、「なつの夜の露なとどめそ蓮葉のまことの玉と成りしはてずは」（寛平御時后宮歌合・五五・左）という歌にも詠まれる。また、『仲文集』八二番の詞書には、「だいわうの宮やけておはしましどころなしとて、一宮にわたらせたまて、又ほかへうつらせたまふに、しろかねのはちすに、こがねのつゆおかせたまて、めししに」とあり、蓮と露の豪華な贈り物が作成されたことも知れる。このような当時の生活の実際が、当該歌の発想の根底にあるか。

また、「はちすばのたまとなるらんむすぶにもそでぬれまさるけさのつゆかな」（蜻蛉日記・上・八九）は、極楽の蓮葉の玉になっているだろう亡き母への思いを詠むが、当該歌には、このような仏教色はまずないと見られる。

## 附記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」（課題番号22500236、平成二十一〜二十四年度）における研究の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CDROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究所）作成の文字列解析器「eCSA」 Ver.2.00を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げる。

## 〈附録〉

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖（6）くたに―連―

## 凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに（ ）を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一巻 1古今和歌集〜4後拾遺和歌集

第二巻 1万葉集〜6和漢朗詠集

第三巻 1人丸集〜81赤染衛門集

第五巻 1民部卿家歌合〜61源大納言家歌合 長久二年、253紀師匠曲水宴和歌〜269九品和歌、281歌経標式（真本）〜285新撰髓脳290新撰和歌髓脳、347古事記〜353風土記、371日本霊異記、372三宝絵、389土左日記〜393和泉式部日記、414竹取物語〜420落窪物語

第六巻 2秋萩集〜5麗花集

第七巻 1奈良帝御集〜36肥後集

3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数・通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。  
〈例〉3―19貫之355『新編国歌大観』第三巻19番目の『貫之集』355番歌

4、別出本文に異同のある場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異同のみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいものの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、〈参考〉と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〈未詳〉と記し、傍線を付す。

### 別出歌一覧

くたに

3782 散りぬれば後はあくたになる花をおもひしらずもまどふてふかな

1―1古今435、3―37遍昭31、5―285新髓脳14「後は芥と」

3783 みなかみを山にておつるたきつせのしづくのたえずそそくたにかけ（つら

ゆき）

〈未詳〉

さうび

3784 われは今朝うひにぞみつる花の色をあだなる物といふべかりけり

1―1 古今 436

かるかや

3785 まめなれどよき名もたたずかるかやのいざみだれなんしどろもどろに

〈未詳〉

〈参考〉 1―1 古今 1052 「なにぞはよけく」「みだれてあれど」「あしけくもなし」

3―4 猿丸 46 「なにかはよけて」「みだれてあれど」「あしけくもなし」

あきかぜにみだれそめにしかるかやを我ぞつかねてやふきくれみし

〈未詳〉

4787 かるかやのほにいでて物をいはねどもなびく草ばにあはれとぞみし

5―26 坊城合 11 「あゆく草ばに」「あはれとぞ思ふ」

かや

3788 かはかみのねじろたかがやあやにあやにさねるねてこそことにいでにしか

2―1 万葉 3518 「さねさねてこそ」「ことにでにしか」

かやの野べいともかるるかみねのうへのまつが枝ともにひさしきものを

〈未詳〉

3790 なぬかかるかやは我が身のうへなれや人におもひをつげでやみぬる

〈未詳〉

はちす

3791 ひさかたのあめもふらぬかはちすばにたまれる水のたまにむみん（やかもち）

2―1 万葉 3859 「たまににたるみむ」

3792 はちすばにいであるつゆの玉水はうかべる人のこころとぞみる

〈未詳〉

みどりなりとおもふばかりにはちす葉のかは身にさへもしみにけるかな

〈未詳〉

3794 にごりえはかたふかくこそあせにけれみをはちすさへみれば老いけり（伊勢）

勢）

3―15 伊勢集 249 「にぐるえの」「みればおひにけり」

3795 はちすばのにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく（へぜう）

1―1 古今 165、3―7 遍昭 34、2―6 和漢朗 181 「にごりにそまぬ」「など

かはつゆを」

吹くかぜはかをのみそふる我がやどのいけのはちすをとりなつくしそ

〈未詳〉

3797 つゆをだに玉となしつるはちすばにおもふ心をいれてみせばや

〈未詳〉